様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２９ 日現在

機関番号：３３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ０１１５４

研究課題名（和文）20世紀前半・民国期における中国の経済的ネットワーク展開と地域統合に関する研究

研究課題名（英文）On the development of regional integration by new economic networksystems in the age of Republic of China,the first half of 20th century.

研究代表者
藤田　佳久（FUJITA, Yoshihisa）

愛知大学・東亜同文書院大学記念センター・名誉教授

研究者番号：７００６８８２３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：成立した民国期は中央体制が不安定で、各地の軍閥が省単位や省の併合での独立をめざしたため、若干の税関取扱を除くと研究の裏付けをなす統一的データを欠くため、折から上海に誕生した東亜同文書院の書院生たちによる各地調査、書院卒業生の民国での経済活動の側面からのアプローチで進めることができた。その結果、強固な伝統的地域枠の存在と、それらを越える長江流域の上海を起点とした流域経済圏形成の動きが、列強側の投資を支える民族資本勃興の形で表面化してくることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
中国における経済的地域間ネットワークは、清朝時代の両替商として発展した山西商人のネットワークが代表的であった。しかし、それが清朝滅亡によってその支えを失い、民国期当初は御破算的状況となり、列強国、軍閥、土着ベースの民族資本などが新たな地域ネットワークを形成のアクターとなり、その後の民国期後半、北伐による民国統一後の地域システムを形づくった。その解明は戦後の共産中国の改革開放後の基盤につながり、中国社会も多分にその背景を構成しているものと思われ、現代中国のベースを理解する上で研究意義があるものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：(1)China was dramatically changed from traditional Qing Dynasty to Republic of China by the Chinese Revolution happened in 1911. However ,this gave the political confusion by the army cliques in each province stood up to get the independent of their provinces expanding their military power, and a lot of wars were occurred among army cliques. This showed the regional-traditional power was strong.
(2)However, on the other side, the modernized waves were extended to cover the basin of Yangtze River from Shanghai which was the harbor in first western style in China, and became the central town by trading with other countries, and moreover developed the networks with upper areas of basin of River Yangtze. These networks were based on the trading, and gave the modernization in remote areas, and at the same time, these movement could easily cross the traditional areal boundaries. Thus, the wave of modernization spread and formed the first zones based from Shanghai.

研究分野：人文地理学

キーワード：民国期中国　地域間経済ネットワーク　中国近代化　長江流域圏　伝統的地域枠　東亜同文書院生の中国大調査旅行記録　東亜同文書院卒業生

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）本研究の担当者は、1901 年、上海に開設された東亜同文書院の学生（以下書院生）たちの中国全土をほぼカバーして実施された貿易用品調査報告に含まれる多くの現地踏査の情報から、清末から民国期、つまり 20 世紀前半期の中国の実情に強い関心を持ち、それらの記録を出版した経緯がある。その報告書の内容はきわめて臨場感があり、そこに描かれた当時の中国の地域的なまとまりのレベルに多大な関心を持った。しかも、その時代は清末から民国への転換という大激変があり、各地域の対応は流動的であり、その流動性の中に省を中心とした地域再編や排外運動の浸透などがみられ、それらが地域的にどのように収斂するのかという点にも強い関心を持った。

（２）そのため、中国国内の文献、資料も求めたが、大勢を把握できる文献、資料は少なく、個々の省レベルや町レベル、組織レベルの動きが示される程度で、わずかに租界を経営する列強の貿易統計がデータを示すにすぎなかった。それに対して、東亜同文書院生の大調査旅行記録とそれらをまとめた『支那省別全誌』と『新修支那省別全誌』はそれらの空白を埋めるデータが多く、全体としての信頼性も高いため、現地踏査記録も活用してこの研究テーマにアクセスできると考えた。ただし、上記の『新修支那省別全誌』は日中戦争と太平洋戦争下の東京空襲で原稿の大半を焼失したため、時系列分析が困難な省もあり、その点は工夫が必要となった。

２．研究の目的

（１）本研究の目的は、清末期の中国と、その清朝が崩壊した辛亥革命後の民国期へと大きく変貌した 20 世紀前半期の中国において、一方で日本も加わっていく列強の進出という複雑な要因下、混乱の拡大と新たな産業や列強進出による港湾、鉄道などのインフラ整備も進む中で、中央政権の不安定化もあって、従来からの省をベースにした軍閥が省単位や他省の併合も図る国内の分散化の動きも生じる中で、新たな民国内がどのようなまとまりを示すのかを経済的な地域間ネットワーク化の動きに注目してそれにアプローチを試みようとした。

（２）そのような混乱が拡大する中で、民国政府の統治機能地域レベルでは弱体化し、とくに旧満州では行政組織が未確立な県も多くを数えたほどで、その結果、この時期における経済的な各種関連データは不揃いで、各省間の比較するに足るデータの欠落も多く、また入手もきわめて困難であった。そこで、折しも 1901 年に上海に日本のビジネススクールとして開設された東亜同文書院および同書院生たちによる中国・満州（さらに東南アジアも）についての貿易品調査を主とした現地踏査による日誌と調査報告書（卒論）の諸記録と前述した『支那省別全誌』全 18 巻、『新修支那省別全誌』（全 23 巻中 9 巻で戦争により中止）、『支那経済全書』全 12 巻などの記録データをベースに授用してアプローチを図り、これらのデータの使い方も研究目的とした。なお、それに関連して当時、日系資本の進出もめざましく、その先陣を書院生たちが活躍していたことから、彼らの就業軌跡も参考にしながら研究目的へのアプローチを図った。

３．研究の方法

（１）前述のように研究目的へのアプローチをするには政治的、経済的、社会的に混乱期であった清末から民国期における当研究目的に充当できる資料・データは数少ないため、東亜同文書院生の全国 700 近い踏査による調査旅行の関連記録を授用した。そのような混乱期にあっても開港都市の税関は租界列強国の収入源になるため貿易量のデータは使用でき、一部授用し、都市間のネットワークへアプローチした。

（２）なお、地域間のネットワークを検討するさい、当時の中国は統一貨幣ではないため、度量衡
も地域間格差が多様であった。そこでこの度量衡の地域格差が大きい地方ほど伝統的で地域固有の独立性が高く、その逆の場合は例えば省の中心都市との連関度が高いとみなし、地域ネットワークに関係性があるとみなして省の地域内格差の処理する方法をとった。

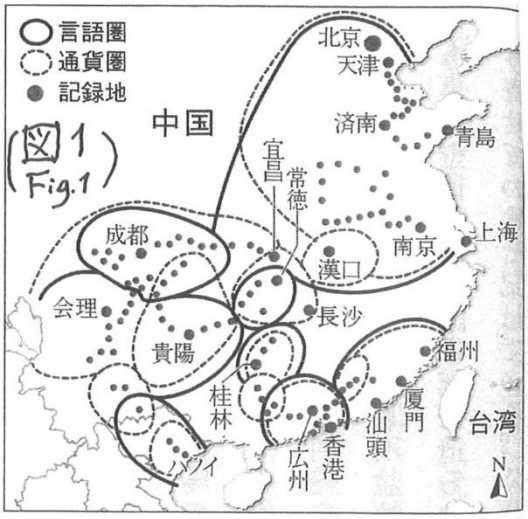
４．研究成果

（１）伝統的地域の確認

研究を進める上で、混乱期ではあれ、長い歴史をもつ中国では、かつての国内に興亡した国々の背景もあり、言語　文化　民族の地域差は存在してきた。そこでそのような中国国内のローカルなまとまりを浮かび上がらせるために、書院生の記録の中にみられる各地の言語や地域通貨の分布を地図上に示してみた。図１がその結果である。言語は北京語は広範囲に分布するが、全体

としてみればローカルで、各地方に言語がまとまりながら分布していることが明らかになった。そのまとまりを広く「文化圏」の分布として示し、一方、地方通貨のまとまりも示して、それを「経済圏」の分布として示した。すると言語の「文化圏」と通貨の「経済圏」は各地域毎に整合的にまとまった分布をしめすことがわかった。この両者の重なる地域は文化と経済が整合していることから、強固な伝統的な地域の存在という形を示している。（図 1）

このことから、当時の中国は北京圏域が若干広いものの大勢を占めているわけではなく、山間地域と広がる西南部ではいくつもの伝統的地域が分布していることがわかる。このことは、当時の新たな時代、つまり近代化の波の中で伝統的な防波堤をもつ圏域が張りめぐらされていたことになる。
この上に新時代の新たなネットワークが進出し、拡大できるかということが本研究の目的ということにもなる。



書院生の調査から作成した言語圏・通貨圏（藤田原図）

（２）そのような状況をベースに辛亥革命の政変の混乱期に軍閥などの省独立の軍閥間や政府との戦いがあり、列強の進出が続く中、後半は日本の介入もあり、日中戦争も生じ、混乱は増幅した。その中でも近代化は進む局面もあった。その基点は、列強の租界が集積した上海にあった。上海は東支那海の入海を利用した貿易港となり、西欧型の貿易港として中国全域に影響を及ぼすほどの存在となった。上海は長江の河口部あり、海岸と長江流域を相手にする強力な貿易港となり、中国国内の各地域との水運ネットワークを整備・拡大した。上海には列強の商業、金融、貿易資本が集積し、航路の内航拡大により、列強国のみならず、やがて国内資本の紡績業が内路からの綿花搬入で発展し、長江流域との強いネットワークを形成した。航路の拡大は多種多様な原料の集散地となり、上海を近代工業都市として育てた。その中流の漢口は内航の拠点となり、漢口は河川を通じて流域内の 2 次的経済中心地となり、その先々に漢口とつながる副次的中心地も形成し、上海を中心とした流域圏ネットワークを形成し、このようなネットワークを通じて中国の近代化が進んだ。そして前述の伝統的地域の中に副次的な漢口、さらに上海とつながる新たな機能の拠点が形成された。

（３）20 世紀前半期における中国の経済ネットワークの展開には、日本側が関与した部分も大きかった。日本側の中国におけるネットワークについては、今回の研究期間の前半期に東亜同文書院卒業生の軌跡を明らかにすることにより、その片緯を伺い知ることができた。そのさい、東亜同文書院の指導者などがどのように行動し、その経済的ネットワークを促し、確認しようとしたのが本年度の成果である。その指導者は東亜同文書院の開設に大きく寄与した根津一院長に次いで二代目の院長となった杉浦重剛であり、杉浦の行動軌跡とそこから浮かび上がる経済的ネットワークへの指向を検討した。

杉浦重剛は東亜同文会会長の近衛篤麿から依頼され、二代目の院長となった。杉浦はすでに「称好塾」を主宰し、全人教育を実践して全国にその塾生が広がっていた。それゆえ、その実践を評価した近衛篤麿が杉浦に書院の院長を託した。その任をうけた杉浦は、明治 34 年（1902）の 4 月から 5 月にかけて清国末期の中国
と東亜同文書院を歴訪し、書院生が卒業後の活動舞台の整備を考慮しつつ、日本側の中国経済ネットワークへの接触を試みていたことが明らかになった。1 つは杉浦の名が中国側にも知られ、杉浦へは多くの中国側の上海・長江流域圏の指導者達が接触を求めてきたことであり、杉浦も中国側の日・中企業に接触を図った。現地新聞社、商事、貿易会社、銀行、領事館、船舶や石炭会社、汽船会社、その他と接触したことがわかる。2 つは、長江中流へ向い、漢口近くの大冶鉱山の見学も行い、日本の八幡製鉄とのネットワークもふまえ、張之洞総督とも会見し、地下資源をめぐる友好関係を構築した。

以上、日本側、とりわけ東亜同文書院側からの中国での経済ネットワークへのアクセスを見出すことができる。ただし、この歴訪後、杉浦院長は体調を崩して死去、そのあとを根津一初代院長が三代目復活し、その後の書院を発展させた。

（４）もう一つ。（３）よりも時代が下がって、書院卒業生の中国での就業地がふえる中、中国のこの時代の経済ネットワークの動きがうかがわれる。（図 2）はその書院卒業生の就業地の分布を示したものである。日経企業の進出は中国側の対応や資本とのつながりもあり、卒業生の就業地は多くが日系企業であり、満州部分は満州国成立にかかわる部分であり、間接的部分とみなすことができる。このようなデータから、中国側の地域間ネットワークをうかがい知ることもできる。それをより直接的に解明する方法を次の課題として検討中である。

（５）以上、研究成果はまだ各論的にまとめたにすぎないが、それぞれを本研究目的に沿うようにもう少し作業をすすめ、ブラッシュアップさせたい。

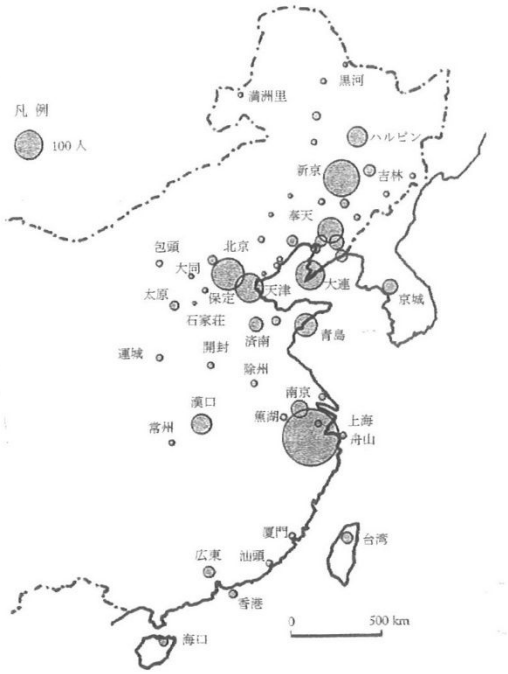


図2 東亜同文書院卒業生卒業後の中国での就業地
（1941年現在、1期から37期まで）
（卒業生名簿の判明分より作成）
藤田佳久（2001）［A］（「東亜同文書院卒業生の軌跡」より）

＜引用参考文献＞

①藤田佳久（2018）「東亜同文書院生の大調査旅行と『支那省別全誌』および『新修支那省別全誌』との間―書院生から見た近代東アジア―」、
『同文書院記念報』vol.26、3～28
②東亜同文会（1913）『支那省別全誌・第15巻、得江蘇省』、東亜同文会刊 25～139、593～678p
③東亜同文会（1907）『支那経済全書』第1巻、丸善株式会社刊、第2輯、第1編
④馬場鍬太郎（1928）『支那経済地理誌・制度全編』禹域学会刊 1290～1305
⑤馬場鍬太郎（1936）『支那水運動編』、東亜同文書院支那研究部刊 157～227

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 藤田佳久	４．巻 29
２．論文標題 上海東亜同文書院委おける医療環境の変化	５．発行年 2021年
３．雑誌名 同文書院記念報	６．最初と最後の頁 3-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 藤田佳久	４．巻 29
２．論文標題 愛知大学創設期における卒業生の在学状況とその後の軌跡	５．発行年 2021年
３．雑誌名 同文書院記念報	６．最初と最後の頁 93-226
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 藤田佳久	４．巻 29
２．論文標題 ドラマチックな愛大誕生物語	５．発行年 2021年
３．雑誌名 同文書院記念報	６．最初と最後の頁 227-264
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 藤田佳久	４．巻 28
２．論文標題 「荒尾精と日本初のビジネススクール・日清貿易研究所の誕生」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 同文書院記念報（愛知大学）	６．最初と最後の頁 5-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 藤田佳久	4．巻 28
2．論文標題 東亜同文書院生の「大旅行」の展開と記録された近代中国像	5．発行年 2020年
3．雑誌名 同文書院記念報（愛知大学）	6．最初と最後の頁 29-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 藤田佳久	4．巻 27
2．論文標題 上海を初めて日本人に切り拓いた青年藩士たちと岸田吟香	5．発行年 2019年
3．雑誌名 同文書院記念報（愛知大学）	6．最初と最後の頁 115-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 藤田佳久	4．巻 59-3
2．論文標題 幕末期に上海を訪れた日本人藩士たちと岸田吟香の行動空間	5．発行年 2018年
3．雑誌名 歴史地理学	6．最初と最後の頁 66-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤田佳久	4．巻 30
2．論文標題 「東亜同文書院二代目院長・杉浦重剛の清国および上海東亜同文書院への訪問について」	5．発行年 2022年
3．雑誌名 同文書院記念報	6．最初と最後の頁 5-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 藤田佳久
2．発表標題 東亜同文書院による大調査旅行と描かれた東アジア地域像
3．学会等名 神奈川大学日本常民文化研究所研究会（招待講演）
4．発表年 2019年

1．発表者名 藤田佳久
2．発表標題 日本初のビジネススクールとして誕生し、発展した東亜同文書院
3．学会等名 愛知大学東亜同文書院大学記念センター講演会
4．発表年 2019年

1．発表者名 藤田佳久
2．発表標題 京都若王子神社に祀られた近衛篤麿公から荒尾精に送られた「東方斉荒尾精先生の碑」を読む
3．学会等名 荒尾精追悼墓参会
4．発表年 2019年

1．発表者名 藤田佳久
2．発表標題 上海を日本人に初めて切り拓いた青年藩士たちと岸田吟香
3．学会等名 愛知大学東亜同文書院記念センター講演会
4．発表年 2018年

１．発表者名 藤田佳久
２．発表標題 荒尾精と日清貿易研究所－世界初の本格ビジネススクール
３．学会等名 荒尾精追悼墓参会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 藤田佳久	４．発行年 2020年
２．出版社 あるむ	５．総ページ数 264
３．書名 東亜同文書院卒業生の軌跡を追う	

〔産業財産権〕

〔その他〕

愛知大学リポジトリ：東亜同文書院大学記念センター https://aichiu.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_snippet&index_id=883&pn=1&count=20&order=2&lang=japanese&page_id=13&block_id=17

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関